

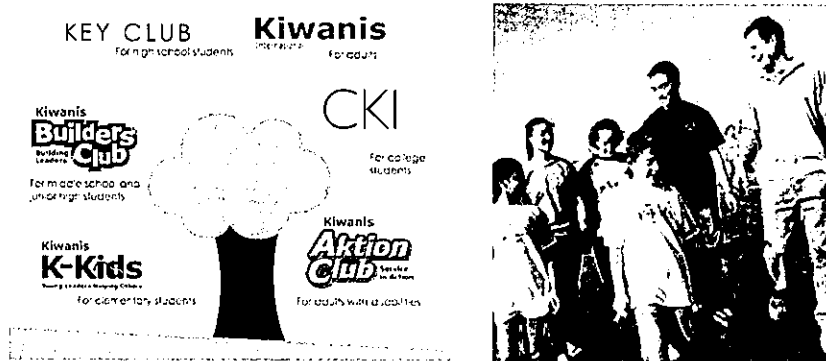
トピックス

1. 新しいSLPの風

青少年教育委員長 多田 玲子

SLPとは

「SLP」はService Leadership Programsの略であり、奉仕を通して若者のリーダーシップ育成に貢献する機会を提供するという、国際キワニスが他の国際民間奉仕団体と異なる大きな特徴です。小学生 (K-Kids)、中学生(Builders Club)、高校生(Key Club)、大学生(Circle K)などキワニスの青少年版ともいえるボランティアを行う児童・生徒・学生組織が学校や地域に存在し、それを地域のキワニスクラブがスポンサークラブとして支援するこの枠組みは、キワニスクラブを長として様々な年代が存在して地域貢献や奉仕活動と一緒にやっていることから「キワニスファミリー」とよばれ、現在、ファミリー全体の会員数は670,000名に近い大きな組織です。



アジア・太平洋諸国におけるSLPのクラブ数 (ASPAC資料2015/2/24) からも、ASAPC諸国の活発なSLPの現状が伺えますが、日本地区でもようやくサークルK芦屋が誕生し、2015年1月17日に認証式を行い(認証は2014年12月1日)、国際的にも日本地区でのSLP開始が認知されました。

	Circle K 大学生	Key Club 高校生	Builders Club 中学生	K-Kids 小学生	Aktion Club	合計
オーストラリア	0	2	0	5	6	13
韓国	0	4	0	0	0	4
マレーシア	5	13	4	12	4	38
ニュージーランド	0	3	3	1	0	7
フィリピンルソン	10	15	3	18	2	48
フィリピン南部	5	1	1	2	0	9
台湾	13	50	17	52	0	132
シンガポール	0	4	0	1	0	5
中国	0	2	0	0	0	2
インドネシア	0	0	0	1	0	1
スリランカ	0	1	0	0	0	1
日本	1	0	0	0	0	1
合計	34	95	28	92	12	261

サークルK

日本初の大学生組織 サークルK芦屋の誕生は、意欲ある学生ボランティアの発掘やその育成のためのさまざまな事業の結果であり、一朝一夕というわけではありませんでしたが、それをサークルKとして開花させた後も、さまざまな課題があることは否めません。最初の関門は、認証手続き、規約を始めさまざまなクラブ運営に関する資料はすべて国際サークルK本部が提供する英文のものであり、未経験のクラブ側にも学生にとってもハードルは高く、またアメリカ式組織運営がそのまま日本に当てはまるわけではありません。しかし、「世界と地域の子どものために」というServing the Children of the Worldのキワニスモットーをまずは学生なりに解釈し、自分たちのできること、やりたいことに取り組むこととし、スポンサークラブとしての芦屋クラブはキワニスコネクションをいかし、彼らに定期的に活動できる場所（養護施設や小学校など）や機会を提供する役割を担っています。また、サークルK芦屋は、学校を拠点とするのではなく、複数の大学の学生から成る地域型サークルKであるため、主な連絡手段や事業内容の検討はオンラインで行い、事業を行う前に実際に会って打ち合わせを行うという形式を取っています。「当初、オンラインミーティングやSMSだけではなかなか仲間意識が深まらなかったが、実際に一緒に子どもに関わるボランティア活動を通して、互いに仲間として認知できるようになっていった」というある学生の言葉は、我々キワニアン同士のつながりと同じだとは思いますが、それを学生が自分たちで経験し、組織をまとめる難しさも痛感しながらよりよい関係を築いていくことこそSLPの意味があると考えています。

SLPの存在は、スポンサーをするキワニスクラブ側にも大きな変換をもたらします。クラブは学生との連絡を密に行う担当のアドバイザーを任命しますが、アドバイザーはもとより、クラブ全体で、学生たちと共にボランティアを行う対等な仲間として迎え、若者ならではの豊かな発想を期待する姿勢が求められます。学生たちが役割と責任を持ち自分たちの頭で考えて行動している姿を見た時、SLPをサポートしてよかったという意識がクラブにも生まれますし、キワニアンだけでは難しい企画も学生たちとの協働で活動の幅が広がります。芦屋クラブを例にあげると、毎年参加している地域のさくら祭りでの模擬店設営は、小規模クラブとその年齢構成からクラブ会員だけではマンパワーの面から継続は難しかったと思われませんが、学生との協働により模擬店内は活気にあふれ、キワニスファミリーの交流の場にもなります。昨年4月の関西北ディビジョン4クラブでの合同ワンデーでは、子ども達100名を越すパフォーマンスという企画で、学生は、キワニアンとの合同司会、参加児童のアテンド、会場内での募金集めという役割を担いましたが、プログラム運営に携わるキワニアンと連携をとり子ども対応にあたる学生の機動力は、この企画に不可欠だったといえるでしょう。8月には、神戸キワニスクラブからもサークルK学生に依頼があり、幼児への英語絵本の読み聞かせの会の講師を務めました。子ども達の保護者からも好評を得たとのことなどから、子どもと関わる事業内容の場合、学生たちの存在が、大きな成功の鍵になりうるといえます。

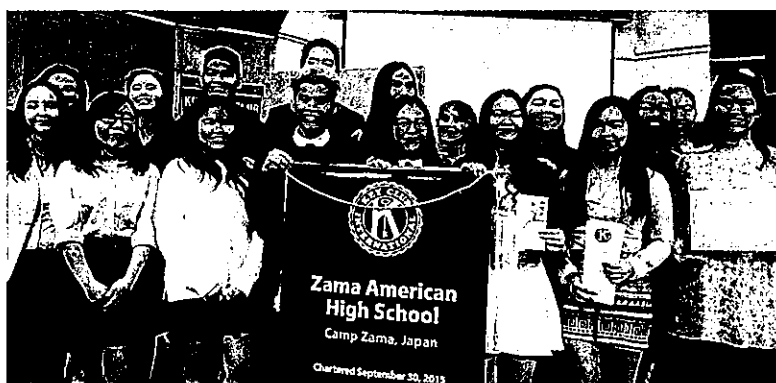
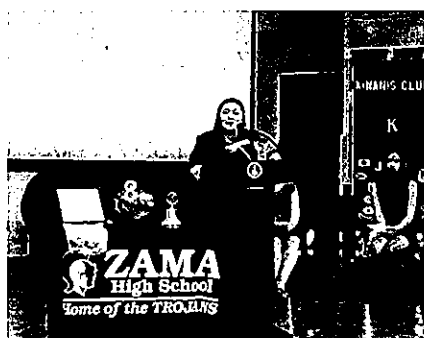


キークラブの誕生

さて、このSLPの新風は、次に日本初の高校生組織誕生へとつながっていきます。キークラブは、1925年設立、会員数約272,000名、クラブ数5,180を超える世界最大の規模をもち、インディアナポリス世界大会においては、キークラブ会長が今後5年間で300万ドルのエリミネイトへの募金金額を公約したというほどの、キワニスファミリーでは最もエネルギーのある組織といえます。

日本初キークラブ設立の発端は、2015年6月、座間米軍基地内にある座間アメリカンハイスクールの学生が、キワニス国際本部に一通のメールを送ったことに始まります。「授業でキークラブの存在を知り、自分たちの学校でもキークラブを設立したい」という内容のものでしたが、そのメールは本部から日本地区に届き、そして、当時、次期青少年教育委員長であった私がおの対応をすることになりました。学生たちと何度もメールでやり取りを重ね、キークラブの理解とチャーターへの準備を進める中、9月には学校を訪ね実際にコアとなる学生たちやスクールアドバイザーに会って話し合う中で、彼らの積極性や熱意や信頼できる先生の存在をこの目で確かめ、日本初キークラブにふさわしい素晴らしい組織ができる可能性を確信し、東京クラブにスポンサークラブへの依頼をしました。これまでユースフォーラムなど、さまざまな青少年育成プログラムの経験のある東京クラブは、SLPの必要性を理解されており、心よくスポンサークラブを引き受けて頂き、チャーターの目途が立ちました。以降は、東京クラブ、吉田アドバイザーと日本地区SLPとの連携でチャーターへの作業を進め、9月30日に認証に至り、2016年1月9日、ようやく無事に認証式を終えました。

認証式には、倉田ガバナー、藤原次期ガバナー、淡輪事務総長、北里国際理事を始め、東京キワニスクラブ吉国会長、吉田アドバイザー、杉田副会長、荒木キワニスファミリー委員長およびゲストの総勢16名が出席し、キークラブメンバーの保護者や先生方と共に、日本初のキークラブ設立を祝い喜びました。



特記すべきは、チャーター申請時には15名だった会員が、数か月たった認証式の時点で31名に倍増している事実で、なんとも驚くべき高校生たちですが、その頂点にいるのは、並外れたリーダーシップを備えた会長アンジェリカ(3年生)。彼女は昨年まで在住していたアメリカで2年間のキークラブ経験があり、キークラブが何たるかを熟知しており、6月の卒業までにそれを次の会長や役員に伝えたいという意気込みと卒業までにやりたいアイデアに満ち溢れている、実に頼もしい会長です。学校側もスクールアドバイザー・シマー先生は生徒の自主性を尊重する信頼できる先生で、校長先生はすでに十分なキワニスへの知識と理解をお持ちであり、加えて保護者の方々もキワニスを御存じの方が多く、申し分のない環境です。アメリカでのキワニスの知名度の高さを改めて認識すると共に、座間アメリカンハイスクールキークラブがこれからどのような活躍をしてくれるのか、また日本地区として一緒に活動できるのが本当に楽しみです。

次なるSLPの可能性

さて、2016年以降のこのSLP新風はまだまだ吹き続きそうです。

座間アメリカンハイスクールの認証式には、ゲストとして都内の大学生6名が参加しておりました。彼らは、大学を拠点にサークルKを設立したいと考えており、すでに行っている児童養護施設訪問の活動をベースとして、新たなボランティア活動の枠組みをキワニスクラブと一緒に創り上げたいという、意気込みと実行力のある学生たちです。日本初の大学ベースのサークルKとして、産声を上げる日も間近と思われれます。

日本型SLPをめざして

キワニスの今後の展望を考える時、キワニスの独自性をさらに強化していくこと、つまり「子どものための奉仕」に特化していくことは、多くのキワニアンが認めるところです。と同時に、もうひとつの独自性、その奉仕をさまざまな世代に広め、次世代がボランティアを通してリーダーシップを育成していくSLPの重要性を認識し、各クラブがその可能性を模索しチャレンジすることが、日本地区のSLPの次の1ページとなるはずですが、倉田ガバナーは今年度の日本地区活動方針にもSLPの充実を掲げられておられますが、まずは若い世代との交流を活発化することから始めてみることで、キワニスクラブそのものの活性化にもつながるのではないのでしょうか。

一足にキークラブやサークルK設立というのではなく、現状で各クラブが実施されておられる活動の中で、次世代が関わる企画、例えば、キワニスドール作りの学生ボランティアや、留学生・児童・学生のボランティア発表、表彰、コンクールなどで、自ら行動を起こしたいがノウハウがないなど支援を必要としている若手人材やチームを発掘し、キワニスクラブと協働してその活動が達成できるよう働きかけをしてみることから始めてはいかがでしょうか。実際にキワニアンと協働するなかで、学生はキワニスの広い人脈や様々なボランティア事業の蓄積などに触れることになり、それは学生がキワニスファミリーに興味をもつきっかけになるはずですが。

また、学生たちには、キワニスファミリーの一員となるメリットを明らかにする必要があります。大学にある他のボランティアサークルとの大きな違いは何なのか、それは ①キワニスクラブの財政的支援と奉仕のノウハウを得られること、②国際的な組織であること、③社会経験の豊かなキワニアンとの交流により幅広い知識を得られること（大学生であれば就活の相談も含めて）などが挙げられます。

ただし、SLPを充実させるためには、今後さまざまな条件整備が日本地区にも必要となります。チャーター後のクラブ運営に関して、英語版ではない日本の現状に即した最低限の日本語版規約が、今後一定の活動の質を維持するためには必要ですし、複数のSLPのクラブが一同に会する機会を日本地区として提供し、SLP参加への動機付けや意欲向上を図るなど、キワニスファミリーとしての新たな枠組みも早急に必要です。また、現状では国際的組織とはいえ、海外のSLPとの交流は北米ベースであるため資金面や安全面からも容易とはいえ、距離的には可能性が高いASPAC諸国内SLPとの交流も、その必要性は叫ばれているもののまだ現実のものとはなっていないという事実に対しても、日本地区として対処が求められます。

この新しいSLPの風がさらに広がっていきますよう、日本地区青少年教育委員長として、皆さまのご意見や学生たちの希望にしっかりと耳を傾けながら、SLPの充実に向け微力ではありますがこの一年尽力させていただきますので、どうぞよろしくお願い致します。